

■今後の展望

今後も長年培ってきた経験を基に、技術・施工部門、営業部門、管理部門が一体となってこの時代を乗り越えていく。

自然の改変を伴う建設工事に従事する、基礎工事專業会社として、自然と共存する姿勢を柱としている。

環境保全型技術の発展、公共事業に対するコスト削減型技

術の発展など、幅広い分野で先見性を発揮して、社会への貢献に努める。

激務ゆえ健康にはくれぐれもご留意を。

(事務局 葭田 誠作)



わたしの履歴書

岩盤削孔技術協会 事務局長
日本基礎技術 専務取締役 中原 巖



中原 巖 (なかはら いわお)

昭和26年9月16日 山口県生まれ
昭和56年 日本基礎技術(株)入社
平成18年 専務取締役に就任

■郷里・幼年時代・学生時代

瀬戸内海のリゾート地であった柳井、「男児立志の詩(男児志を立てて郷関を出づ…)」で有名な「月性」の出身地、柳井市遠崎で鉄工所の長男として生まれた。

家の前は瀬戸内海、台風のとときは天から潮水が降ってくる。水泳と魚釣りは大の得意。

家は貨車や新幹線の車輛部品や石灰岩を砕くハンマー部品などを作る鍛造屋。小さい頃から、昼寝、手伝い、見様見真似の鉄のおもちゃ作りなどゴーンカンカンという音と油臭い隣の工場が生活の一部。

小学生では工場での熱い製品運び、中学生では罫書きや簡単な工作、高校生のときは旋盤、シェーバー、ボール盤、溶接などの本格的な機械工作と、ものづくりの心は身に染みている。

クラブ活動は、中学ではブラスバンド部でクラリネット、トランペットの吹奏や指揮を、高校では剣道に励んで二段。

大洋底の資源開発、海底石油開発を夢見て、東海大学海洋学部に進学。大学、修上を通して通産省との海底資源調査や多くの調査航海に乗り込んだ。

コバルトブルーの海原に浮かぶ白い砂浜、緑の島が日に飛び込んできたときの感動、砂浜を歩く人を見つけたときの懐かしい嬉しさ、マーシャル諸島マジロのさんご礁の美しさ、記憶に強く残っている。

■社会に出て

大学を卒業して5年間、東海大学海洋学部で教鞭をとった後、昭和56年に日本基礎技術(株)に入社。

入社以来、技術本部で小口径推進工法や永久アンカー工法の開発、施工、技術指導や大きなトラブル現場での問題解決に当たった。

平成4年、イタリア・トレビ社から芯材補強アンブレラ工法(崩壊性地山のトンネル掘削補助工法)の導入に伴い、トンネルの施工方法も知らないながら、技術習得のためイタリア・トレビ社に出張して国内展開を担当。本四架橋の本州側アプローチの大断面トンネル・舞子トンネルを始め、国内初の二階建てトンネル・圏央道青梅トンネルなど、崩壊防止、地表沈下抑制、周辺家屋へ影響抑制を目的に50件以上のトンネルで良好な適用結果を得た。その他補助工法の開発、適用に努め、トンネル補助工法の日本基礎技術としてコンサル・ゼネコンから声がかかるようになった。

その後、トンネル、アンカーの技術、営業、施工の指導をはじめ、社内の技術全般について新技術の開発を含めて、レベルアップと標準化を目指してきた。

■会社の歴史・経営理念

誕生:昭和28年 農業基礎土木からの出発
転換:昭和60年 日本グラウト工業(株)〈ダムグラウティング〉と新技術開発(株)〈アンカー〉が合併して日本基礎技術(株)が発足。基礎技術総合専門会社として出発。
発展:ドイツ・パウアー社からのBG工法導入、イタリア・トレビ社からアンブレラ工法導入等、技術を極めて新工種に挑戦

結実:平成7年、東証1部上場により堅実な企業へ進化:環境、緑化、液状化防止工法などの独自の特許工法で新世紀へ新たなるスタート

経営理念:「人と環境の共生をめざし建設基礎技術で豊かな社会創りに貢献する」

現在、基本となる「仕事のわかる社員づくり」、「コスト対応ができる人と組織づくり」を直営施工を軸に進めている。

■信条・趣味

信条は、「日々新たなり」「笑門来福」
姓名学による鑑定では、「才能・人柄・生涯運・姓と名の調和」が大占。積極的な行動、先見性、明るく誠実な人柄、敏感に反応できる感性を持つ。指導者運を持ち、晩年に財力が得られる人とか。

趣味は「日曜大工」と「健康ゴルフ」。家では「直し屋」の愛称。家の補修や家庭用器具の分解修理に熱中する。ゴルフは、ドラコンよりニヤピン賞に執念を燃やす。

■社員とのコミュニケーション

後進の育成はOJTで、社員一人ひとりとの対話を通して、要素の洗い出し方、考え方、攻め方のレベルアップを図る。ちょっと自分のスタイルを押し付けているかもと振り返ることもある。

■今後の展望

これまでは山間部の工事が主流であったが、これから都市部の工事のシェアを増大する。

都市部の工事は工事条件や内容も複雑で、高い技術力や現場力が成否の鍵。要求性能を満たす施工を提供するという専門工事会社の基本姿勢が大事。

自前のデータを基にした性能発注に耐えられる技術力の整備、さらに独自の特徴ある技術開発、技術導入等による技術力の蓄積を急ぐ。

激務ゆえ、健康にはくれぐれもご留意を。

(事務局 葭田 誠作)



協会ニュース発刊にあたり、執筆者の皆様にはご多忙のところご協力頂きまして誠に有難うございました。(編集分科会)